

第一章 鷺山の民俗

第一節 農耕にまつわる民俗

鷺山の雨乞 古老の話によると古くから続いていると思われる。六月田植期に日照りが続くと、百姓は北伊勢の多度神社に代参し、雨乞の金幣の御札おだを受けに行き、村中の百姓が神官の神事をすました後、薪を積み上げ天を仰ぎ太鼓を打ち鳴らし雨乞祭をしたと言う。その祈願の唄は古老に聞いても記憶は無い。多分雨を下さいと願ったのであろう。

火力が強いほど御利益があったと言われ、北野神社境内や鷺山の山の上でも行われた。真福寺、椿洞、御望の部落からも同時期、また同時刻に、火の手が上り祈ったという。昔を思う時、田の用水は天水の利用度が高く、このような儀式が多く行なわれたのであろう。昭和期に入り、用水路も完備され、雨乞の姿が今は立ち消えた。

鷺山の休日 昔から月の一日・一五日が休日と記した文書があり、昭和三〇年頃まで職人と百姓はその日を休日とした。

いまは、経済の向上と兼業農家が多くなったため、この風習は薄らいて来た。

お湿り休み 昔、日照が続き、田畑の作物、草木が枯れ始めた頃、一夜でも雨に恵まれるとお湿り休みをしたと伝える。お湿り休みは、百姓の人々が多数で区長宅に行き許可を得た。鐘を叩き知らせて歩いた。百姓一同が授雨を感謝し、休日としたものであった。

お湿り休みの明治時代の規定文書には次の内容がある。

一、多数の参同であること。

一、若衆一人だけでは認められない。

一、但し国事、祭礼の場合は認める。

一、六月・十一月は、一切認めない。農繁期による。

一、付則、溝堀は五月一〇日前後にさらえる。

秋上げ休み 田刈りを、一月中旬に終え、小麦・大麦を蒔き、取り入れを終ると、秋上げ休みとなる。百姓達の保養の日でもある。

昔は二月一五日―一六日頃であった。各家庭では新米の餅米をアズキのアンコでおはぎ（ポタ餅）につくり、秋の区切とした。

昔は、労働がきつく大食だった。一握^{ひとつか}くらいのポタ餅を一〇個・二〇個も食べたと自慢し合ったものである。

農休み 六月中頃、麦の収穫後、牛馬を利用して大麦や小麦の田の鋤下し作業に入る。

六月二四―五日頃、田植が始まり、約一週間、雨天の日にも手作業が続く。手・足・腰がしびれる重労働作業である。百姓達は隣りの家が遅ければ手伝いに行き、互いに助け合い完了を急いだものである。かくて、七月初旬第一土曜日、

日曜日の二日間が待望の農休みとなる。

空豆^{そら}を利用してアンコを作り、小麦粉を粘^ねり手の平にのせ、アンコをつつみ、みょうがの葉で丸め、蒸器^{むしき}で蒸して、田植^{うゑ}ぼちを作った。風味は今もなつかしい。疲労回復のもとでもあった。一度に一〇個平気で飯べたと古老は自慢する。子供は疲労も忘れて二日間太鼓をたたいて興^{きよう}じた。棒は柳の枝であった。

当時は養蚕も盛んであったので、お蚕様の眠りが出来ないと叱^しかれ、民家を避けて歌ったり、太鼓をたたいたものである。

町内によっては、山の上や現在の保険局内にあった池へ舟を持ちこみ、朝早くから夜遅くまで、二日間おぼどこへゆきやるの歌をうたいつづけたものである。子供達のふれ合いの場でもあった。

一、お婆どこゆきやるナアナア

お婆どこゆきやるナア

三升樽さげてそんだまええ ヒルルヒルル

二、嫁の在所へナアナア嫁の在所へナア

わしや孫抱きにそんだまええ ヒルルヒルル

と、校下の子供達の歌声が交錯したものであった。今思へば静かな農村風景が思い出され、なつかしい。

家ではミウガぼちを作り、手伝ってもらった親戚や兄弟の家へ贈った。嫁は在所へ帰り、農家はゆつくりと休んだ。

第二節 唄と踊り

(1) 鷺山音頭

作詩 棚橋勤一
作曲 森瀬仙一

(一) ハアー

玉の鷺山今年も光る

チヨイトナ―

咲いた桜に宵の月

花の生酒^{きざけ}で心も浮いて

サテモ楽しい都

ソレ鷺山音頭で

ハアー鷺山音頭で

ヨヤサノサ―

(二) ハアー

稔^{みの}る稲穂に今年も祝へ

チヨイトナ―

燃える紅葉^{もみじ}に宮祭り

唄い歌って秋空高く

サテモ豊かなはやし

ソレ鷺山音頭で

ハアー鷺山音頭で

ヨヤサノサ―

(三) ハアー

昇る朝日に心も溶^とける

チヨイトナ―

流れも清き長良川

人の情は川より長く

サテモ民主のいずみ

ソレ鷺山音頭で

ハアー鷺山音頭で

ヨヤサノサ―

(四) ハアー

此処^{ここ}は良い処^{ところ}歴史は古く

チヨイトナ―

鷺のお宿と道三の

守りしお山は鷺山城址

サテモゆかしい名所

ソレ鷺山音頭で

ハアー鷺山音頭で

ヨヤサノサ―

(五) ハアー
集う村中心も強く

チヨイトナー

白い鉢巻娘たちや
紺のかすり赤ひも締めて

サテモ嬉しい気持

ソレ鷺山音頭で

ハアー鷺山音頭で

ヨヤサノサー

(六) ハアー

西はこがれて鷺山暮れば

チヨイトナー

なびく紫煙のかんばしき

囲む団らん疲れも失せて

サテモ希望の明日

ソレ鷺山音頭で

ハアー鷺山音頭で

ヨヤサノサー

(2) マイソングふる里の鷺山

作詩 小森善次郎
作曲 吹越通
振付 小栗日出子

一、春になったら一度はおいで

武将名残りの鷺山あたり

名所古跡と道三の

古き歴史のある町で

すみれ、たんぽぽ、れんげ草

摘んで遊んだ田んぼ道

花見の宴は鷺山で

二、夏になったら長良の鮎も

尾びれ広げて泳いでいるよ

鵜飼の夜の長良川

かがり火映えて燃える夜は

浴衣姿でお揃いで

老いも若きも輪になって

ふる里ソングで踊りゃんせ

三、秋になったら稲穂が揺れる

たすきかけてたあの娘が可愛い

紺のカスリが良く似合う

祭ばやしの若い衆が

ろ丸の花火をどーんと上げ

神楽にわかで秋が行き

すぎた昔がなつかしい

四、冬が来たよと枯葉が舞えば

伊吹おろしが粉雪散らす

夕日がしずむ大通り

ネオンまたたく街角で

貴方と私の幸せに

夢と望みをくれました

鷺山よいとこふる里よ

※ろ丸の花火とは、昔の秋祭りに鷺山の若い衆がろに丸を染め抜いた幔幕を張りめぐらして、そこで自分達が造った花火をそれぞれ打ち上げて技を競い合ったのです。又、近在の花火大会にもろ丸の幕と花火を持って行き打ち上げました。ろ丸とは鷺山の花火の名じるしだったのです。

※にわかとは、田舎芝居のことです。

(3) 俚 謡 お 婆 々

お婆々何處へ行きやるナーアナナ

お婆々何處へ行きやるナー

三升樽提げてソーラバエー

ヒユルヒユルヒューヒユルヒユルヒユルヒュー

嫁の在所へナーアナナ嫁の在所へナー

ササ孫抱きにソーラバエー

ヒユルヒユルヒューヒユルヒユルヒユルヒュー。

岐阜はよいとこちやナーアナナ

岐阜はよいとこちやナー

金華山の麓ソーラバエー

ヒユルヒユルヒューヒユルヒユルヒユルヒュー

小田の蛙がナーアナナ小田の蛙がナー

寝ちよつても聞けるソーラバエー

ヒユルヒユルヒューヒユルヒユルヒユルヒュー。

(4) 子 守 唄

一、ねんねんころりよ おころりよ
坊やはよい子だ ねんねしな

二、坊やのお守は どこへ行つた
あの山越えて 里へ行つた

三、里の土産^{みやげ}に 何貰^{もら}うた
でんでん太鼓に しょうの笛

四、おきあがり小法師に 犬はりこ
坊やはよい子だ ねんねしな

第三節 鷺山の伝説

(1) 金のにわとり

正木の御馬屋というところで、毎年一月一日の早朝金のにわとりが三回だけ鳴くという言い伝えがある。斎藤道三は、子の義龍と弘治二年四月一八日いよいよ最後の決戦をしようと、鷺山城に兵をあげた。しかしすでに守護職を義龍にゆずった道三の側につく武將の数は、わづかだった。これが最後と心にきめた道三は家宝としていた「金のにわとり」を鷺山の南西にある正木の御馬屋というところに埋めて出陣した。激戦三日間、道三軍もよく戦ったが、ついに力つき敗れ去った。

それから幾年もすぎた。村人の間で誰いうとなしに、元旦の朝になると、御馬屋の方で、ふしぎなにわとりが、「コケコッコ」と三回だけ鳴くという、うわさがひろまった。この声を聞くと、一年中お金にめぐまれ、家運がよくなるという。また一年中しあわせするという。

このようなうわさがたつてから、正木の人々は元旦の朝はとても早く起きるようになったという。なんとかして金のにわとりの声を聞こうとしたのである。埋められた金のにわとりが、この朝だけは地表へ出て来て鳴くというのも、ふしぎである。(後藤時男氏調べ)

(2) 経塚

鷺山村鷺山に経塚あり、文字の記したる小石の出づる由。「新撰美濃志」に記されてあったので、実地踏査中、上土居

観音堂境内で経塚の一個を発見した。年代は不明である。

(3) 首捜しの火

鷺山山頂に首捜しの火と称するものが出た。むかし斎藤道三が弘治二年四月二〇日その子義龍と戦って敗死した。乃ち其の首を捜すものなりという。

(稲葉郡志)

別説では道三が敗死した折、首と胴が別々となったので、道三の亡魂が火の玉となって毎夜、道三塚(胴を埋めた塚)より出て、自分の首を捜し廻ったという。

(4) 弁慶と鷺山

鷺山村鷺山は、弁慶が鷺山と土居の山を背負って来た折、途中で一部分をおとしたものといい、その為、背負った時の背骨と負うたときの縄の跡が禿げて居るという。

(美濃国稲葉郡志)

(5) 枝広の洪水

昔鷺山城に枝広左衛門が住んでいた。或る時、家が流される程の水を下さいと龍神に祈った。そのため洪水となり、上城田寺の山に立石があったので舟がここから発着したという。それにちなんでその立石を舟戸の石といった。枝広とは上福光の地名であると説く人もいる。

(稲葉郡志)

川祭り 昔から続いている行事で、昔は戸羽川・古川を利用して桑名迄、舟の運搬が盛んだったので、その安全祈願の為行われていたという。現在も続いている。祭礼は、七月一六日。

総佛様 無縁佛の供養をする為毎年一二月二二日(冬至)に寺僧を招いて法要を旧町内約四五名で行う。この始まりは、山田慶左という人が、自分の田を寄附し、その年貢で行なわれてきた。その条件として教徳寺の住職に御書を読ん

でもらう為、黒野別院より御書を借りて二人でかついで来たといわれている。(御書の中に正木御坊の事が記されている)
斎藤道三と伊自良街道 美濃国をほしのままにした斎藤道三は、ついに天文一一(一五四二)年五月、土岐守護家の頼芸を大桑城に攻めた。その当時の主要街道が伊自良街道であった。

上土居村の北部から東部を伊自良街道(上土居村字石田・中福光村字石田の境界線を通っているので、別名石田街道とも言った)が通っている。この街道は、伊自良―岩利―北洞―彦坂―西山―椿洞―打越堤―中野―若松―高見(刑務所)―中ノ渡―馬場―西材木町―美園―笠松―尾張と通じていた。彦坂―西山間は昔の武儀街道と重なっている。寛平九(八九七)年醍醐天皇に譲位された宇多上皇が美濃行幸の時この武儀街道を通られたとの伝説もあり、その道順を追ってみると、西から大塚、村山、芦敷、彦坂、西山、栗野、佐賀、深瀬、御鉾、椎倉、宇多院となっている。太平記に依ると、伊自良には南朝の忠臣伊自良治郎左衛門尉秀宗が居て、三〇〇騎を率いて伊自良街道を駆け下り、宮方の旗頭として奮戦しているし、その後一一代美濃守土岐頼芸が天文元年(一五三二)福光に枝広城を築いたが、同三年九月六日郡上川に大洪水がおこった。俗に「中屋切れ」といい、溺死二万人、流失家屋敷を知らずといわれて、城も流失したので大桑の古城へ引き移った。この時もこの道を通った。洪水で「中の渡」の北部の伊自良街道の東側の字桃林にあった最初の崇福寺も流失したので、住職の二世仁岫、三世快川も、この街道を登って大桑に移り、快川は南泉寺の開山となったという。その後、斎藤道三が稲葉山城下町井ノ口の発展を策し、大桑城下の商人を金華山の西麓に移し井ノ口城下を建設し始めると、大桑の町人は総べて移ってきた。中島両以記文には「百曲通ハ大桑之町人共引越、町立」とある。即ち井ノ口城下は平行する二筋の道を造って町通りとしたが、二筋のうち北にあたる道筋に、大桑からの町人を来住させたのが百曲り通りである。今日、上大久和町、中大桑町と、東西につづき金華小学校(旧下大桑町)を貫いている道筋

である。桑原与左衛門の子与市良（中嶋願永）は、山県郡大桑から中大桑町へ移ってきている。当時は交通の多い街道であったし、道三の国盗り奮戦には、この街道が使われたのである。

川港について 木曾三川はよく大きな洪水をおこし、氾濫した。収穫を流し、人命をのみ、人びとが築きあげた労働の成果を根こそぎ奪った。しかし、この地に住む人びとは、水の暴威に苦るしみながらも、暮しを営み、生産にいそしんだ。

弥生中期までの水田は、もっぱら自然灌漑による湿田であった。

やがて人びとは、人工の用排水をすれば米はもっと多くの土地につくることができ、収穫もあることに気づくようになった。その証據として各地に水田が用排水をほどこした乾田に移行した条里制の水路が残された。農作物や衣類のつくり方などが発達し、人びとの生活にゆとりがでてくる。あまつた生産物を他の地方の珍しいものと交換することになる。その交換場所として美濃の小川市がよく知られている。

八世紀の前半、聖武天皇の頃、三野の国の片県郡にある小川の市……岐阜市黒野の古市場、合渡の一日市場ともいわれた……に百人力を自慢する女がいて、往来する商人から荷物をうばっていた。彼女は三野狐の子孫に当たるものだという。一方尾張国の愛知の郡片輪の里に、体は小さいが力の強い女が住んでいた。彼女が、ハマグリを沢山船にのせ、小川の市へ来たところ、三野狐が乱暴しようとしたので逆に打ちすえ、市から追いだした。

そのため市は平穏になり人びとが喜んだという。この話は「日本霊異記」という奈良時代の仏教説話集にえがかれている。人が物を交換するために市に集まり市は賑やかであったこと、そして尾張から美濃までの交通が水路によっていたことがよくわかる。たとえば、天保九年鷺山村、村差出明細帳に依ると「御年貢米ハ、長良川岸迄拾六町程津出し、

夫より桑名湊迄拾三里半川船にて積下、同湊より江戸迄海上百五拾式里余」と記してあり、川は船運としても重要な役割を果たしていた。

長良川筋でも川湊は沢山あった。長良には尾張藩の長良川役所がおかれ、流下する材木と船をあらため役銀を課していた。鏡島湊は加納・岐阜地域の川湊として重要な役割を果たした。農業生産に直接かわりのある肥料として灰や油かすを積んだ小船が多く登ってきた。石船も下った。柿ヶ瀬より旦川を経て鳥羽川、伊自良川を上流から下流へ農林物を運び、桑名から海産物、瀬戸物の瓶・土管を搬入した。鳥羽川ぞいの下土居字北門の城山にも川港もろやまがあつて、荷を積み下して東山道ぞえの侍屋敷・百姓屋敷の消費者を相手に市がひらかれ、物資の交換・売買が行われ、東山道沿えの字市場、字東町並など地域商業の中心でもあった。

オコリ地蔵 鷺山村下土居の安養寺の地蔵に参詣すると、オコリが落ちると云う。

※オコリとは……間欠熱の一種で悪寒・発熱が隔日、または毎日時を定めておこる。多くは、マラリアの熱病である。

(美濃国稲葉郡志)

第四節 衣・食・住生活

一、衣 生 活

ふだん着 戦前までは着物を着ることが多かった。男は木綿のシャツに六尺ふんどしをしめ、上に縞木綿か筒袖たもとが袂

袖の着物を着て、ちりめんの兵児帯へこを結んだ。

女は晒さらしのじばんの上に縞木綿の着物を着、袂袖にたすき掛け、前掛姿であった。寒い時には、胴着やでんちを着た。

子供は縞木綿の筒袖の着物、女の子は袂袖のものに兵児帯で結んだ。冬は男女ともでんちか羽織を着た。

子供を、おぶときは兵児帯を使い、冬は「もりどうぎ」を着た。

はれ着外出着 男の着物は普段着とあまり変わらない。しかし、地主層のあいだでは絹物を着るのがならわしであった。冬は羽織を着、二重マントを着用した。女は外出が少なかった。実家へ年に一―二回行くくらいだった。嫁入りのときもってきたものの中から選んで着た。

農家では嫁に着物を買う与えることは少なかった。

作業衣 男はさらしやネルのシャツを着、その上に筒袖の「はっぴ」を着、細いひもや兵児帯で結んだ。頭は手拭でねじはちまき・ほうかむり、手拭を四つ折りぐらいにしてぐるぐるまきにした。水田にはいるときはもちろん素足すあしであるが、紺の木綿でつくった半ももひきをはき、紺のはばきをつけた。雨天の日は竹の子笠（筍笠）や菅笠すげをかぶり、蓑みのを着た。田植のときは「ごぎ」、後には合羽かっぱをつけた。戦後は多く洋服に帽子をかぶり、地下足袋をはき、レインコートも着用した。

水防のときは男子は陣笠と「はっぴ」といういでたちで、夜は提燈、後にガス燈を使用した。

婚礼衣裳 花婿の衣裳は白の下着に紋入りの着物、五つ紋の羽織に白のひも、角帯に仙台平ひの袴。足は白足袋をつけ、台付きの低い下駄をはいた。花嫁は実家から婚家先まで歩いて嫁入りするならわしであったが、大正の始めごろから人力車を使い始めた。人力車で行くときは婚家先の屋敷まで乗って行き、あと屋敷内は近所の人に見てもらうため歩いた。

婚家先に着くと、座敷の縁から手をひいてもらって上がる習慣であった。三三九度の盃の時は、白むくの着物に綿帽子をかぶった。

披露宴の時は色なおしと言って、衣裳をかえて出た。嫁入り道具は、たんす・長持ち・鏡台・下駄箱・裁縫箱・たらい・膳箱は必ず持参した。その量を三つ、四つとよんだ。

葬式衣裳 会葬者は、男は黒の紋付き羽織、女は白の紋付きの着物に白の帯をしめた。現在は黒の帯をしめるが、相続人の妻は今でも白装束である。

洗濯・保存 大正以前までは特別な洗料はなく、米のとき水で洗濯をしたり、藁灰のあくをとって、それを洗料としてたいた。髪は小麦からの灰で洗った。大正ごろから固形の石鹼がでまわってくるようになり、多くこれを使用した。

髪型・化粧 女は明治から昭和のはじめまではほとんどが日本髪を結っていた。髪結へはほとんど行かないで、家族の者に結ってもらったり、自分で結うのが常であった。子供は髪を束ねて結んだが、だんだん成長すると、おさげ髪、娘はももわれ、そして高島田となっていた。普通はまるまげに結び、老人はいちよう返しに結った。昭和にはいって若い者は「はいから」という髪型に移ってゆき流行した。

染・織 染めは染め粉を買ってきて染めたり、紺屋に出していた。自分の村内になくても、町に近かったため、ほとんど各家庭ではおこなわれなかった。

麻・藤・楮こうぞによる織物は殆んどなく、綿織物がおもにおこなわれた。

二、食生活

毎日の主食 主食は、麦飯 雑炊（おじや）・さつまいもがゆが主で、うどんの煮込み、うどんのすいとんなどは、時折しか食べられなかった。

日清戦争頃の食生活は苦しく、日露戦争まではどん底の食生活が続いた。「くういちめし」といって、米が少なく、麦が大部分で、そこへ菜っ葉をまぜる。従つてその麦飯は麦七・米三といった。米は家でつき、麦は石臼でひきわたるのが女の仕事である。雑炊は「だいこんぞうすい」といって、大根の雑炊をよくつくった。「はそり」の中へ「大根つき」をいれ、その上に塩気として、みそをすつて流し、その上に石臼でひいた屑米くずまいを水でこねてだんごにしたものをうかべていた。だいこんぞうすいに油揚げを二―三個きつて入れたものはご馳走で、とうすひき等の労働後にたべた。菜飯を朝食に使っている所もある。その他、粟、きびは石臼でひいて、餅米と一しょにむして、赤もち（とのきび）黄もち（あわ）にして、煮たり、焼いたりして食べた。

日常の副食 副食は、味噌汁に、漬物・干物（大根・なす・ずいき）・野菜等の自給品が主である。昔は、三度が三度、味噌汁である。一日と一五日には魚（干イワシ・サンマ）を食べた所もあるが、一般に魚気は少なく、食べても小魚が大方で、新しい海魚は殆んど口に入らなかった。

漬物は、年中かかさず食べられるように漬けこんだ。大根漬は、四斗樽に二―三本つけると、六月頃まで食べられた。夏には、梅干し・しょうが漬がされ、年中欠かさないだけもっていた。

調味料 調味料として、多くの家では、みそ・たまりを自家製した。正月の餅をついた後、大豆をせいろでむし、臼

でついでつぶし、にぎりめし大ににぎる。わら縄五〇―六〇センチ長にみそ玉とおし、天井に吊る。自然に糍こしがつき、四月頃にみそ玉がかびだらけになる。みそ玉を四斗樽にいれ、塩と水をまぜ、小屋に保存しておく、土用をすぎると、玉はくずれ、みそこしでたまりとみそにわけられる。三年越しのみそがおいしいというので、長く貯えた余裕のある家もあった。

・行事と食事

正月

雑煮・餅菜・かつお節・煮ほし魚等をいれて餅を煮、たまりで味をつけた。時に黒豆、数の子、にしんを食べて祝ったこともある。

二月正月の餅つきは、餅は一月より二月に沢山つく風習があった。一月二六日―二八日頃、餅つきを行なう。午前二時頃より、かまどに火が入れられ、せいろを三つ重ねにして、蒸しが始まる。木臼を使って、三時頃より男二人がかりで餅つきが始まる。初臼は「鏡餅」、二番臼も鏡餅。三番臼から、「のし餅」。このし餅は、部屋一ぱい薙むしの上に並べられる。朝六時頃になると、「つけ餅」といって、小豆あんをまぶしたものを、朝食がわりに食べる。終りの頃には「おへぎ餅」をつく。これは餅に砂糖・芋のすりつぶしたものとフクラシ粉を入れて臼の中でこねまわしてつきあげる。これを三分ぐらいの厚さにのし広げて後、角切りにし、一分ぐらいの厚さにへいでよく乾燥させる。正月すぎから冬中の子どもの間食になる。のし餅は水につけて保存し、中には、彼岸近くまでたべる家もある。

お盆

「迎え団子」といい、米の粉で団子をつくり供養をした。うどんは、一般には普通食には使われず、仏事のご馳走と

して珍しがられた。又仏壇には、そうめんをそなえ、「冷しそうめん」を食べるならわしがあった。

祭・

鮎の昆布巻、煮つけ、つぼとねぎの味噌あえ等は祭のご馳走である。又赤飯は祭の時にもつかわれた。サバ寿司・コウヤドウフ・長芋の詰め合わせがつくられた。

彼・岸・

春・秋の彼岸には、米の粉、うどん粉で「お彼岸だんご」をつくりお供えた。

報・恩・講・

仏法の盛んな地域で、毎年二月から一月にかけて、各家庭で盛大につとめた。隣家・親戚の呼び衆をし、読経後、「のっぺ汁」（大根・人参・油揚げ・里芋・昆布をまぜ煮た汁）や「いとこに」（あづき・里芋）をつくり、ふるまつた。又、秋あげといって毎年二月一二日には「ぼた餅」をつくった。

・特別行事と食事

結婚披露宴

披露宴には赤飯はつきもの。招かれた親戚・知人・集落の人びとは、祝儀として、赤飯・餅・餅米をもっていくなら



嫁入り

わしがあった。

・帯・祝・い

里方の負担によって、紅白の重ね餅（三・五升）が、仲人・近親者・隣家にくばられた。

七・夜・

子どもが生まれて七日目に、部屋見舞をした。仲人・近親者・隣家の人びとを招いて、振舞酒が出された。赤飯は必ずついた。鶴亀か鯛のモリコミ箱、尾頭つきの鯛と餅一重ねを引出物として配った。

通・夜・

御くやみ見舞といって、親戚は、寿司・餅などを四重もっていくならわしとなっていた。

棟・上・げ・

棟あげの祝いの祝儀として、赤飯を角型にとったものを重詰めにして贈る場合がある。

仏・事・

どんなに乏しくても、仏壇に供える「おぶっぱん」は毎朝たいた。「おぶっぱんなべ」という小さい土鍋に、米一合ぐらいの特別のおくどさんでたいて供えた。昼食後それを取りさげると、子どもが奪い合ってたべた。

・ホ・ウ・ソ・ウ・送・り・

種痘をうけた子どものある家庭では、赤飯をにぎってこぶし大につくり、棧俵きんだわらの上にしきつめた紅白の紙の上に、五・六個のせ、それを道路の四つ角などにおく風習があった。

三、住居

集落形成 集落は概して堤防と道路にそって形成され、水田や道路よりさらに高くして家が建てられた。同じ家でも集落内においては家の高さがその家の家格を表わしている。従って石垣の高さ、「母屋」の高さはかつての格式がある。また水上と水下の集落では、家の高さがちがう。湛水地域となる水下の部落はそれだけ高くすることを必要とした。

家のつくりと間どり 母屋おもやの間どりは、概して「四八」「四六」とよばれる八畳四ま六畳四まの家が多かったという。現在はその原型をみるのが、かなりむづかしい。神棚は座敷の向って右カモイの上に祀つてあるのが普通である。各々の部屋の名前は、台所・座敷・お勝手・オオエとよばれ、オオエはねる部屋、お勝手は食事をするところとなっている。母屋の別棟に物置きをたて、そこに一室を設けて年寄の隠居部屋にあてゐる場合もある。

玄関 元来の農家には、門と共に無かった。行事の時には、縁先から入った。嫁入や葬式の際に縁先から出入するのもその名残であり、縁側を「入側」というのもそれであろう。通常の出入口は、「おとぐち」＝大戸口である。これが農家の玄関口である。家によつては、お戸口がもう一つあり、家族用となり、この入口を入った土間を「下にわ」といい、区別する所がある。

縁側 「入側」ともいう。縁は、元来は家に上る時の上り段が目的であろう。だから、雨にぬれたままのぬれ縁であった。庇の張出しによつて、雨戸がとりつけられてくると、利用価値を増大し、一つの部屋の役割も持つてきた。雨の日の主婦の針仕事の間や、子供や老人の遊び場となり、時には、表の道路を通る人がちょっと立寄つて、縁に腰掛けして話し込んでいく一種の社交場でもあった。

広さは、三尺巾が普通であるが、一間巾のものもある。これには、蚕を飼う農家が、その為に広くしているものもある。

土間 「にわ」という。この「にわ」は、「かど」が昼の作業場であるのに対して、夜や雨天の時の作業場などである。しかし、大家では、お戸口を入った所が一区画されて玄關化したり、又「しもにわ」があり分化した家も多くなっている。大抵の家は、大黒柱と小黒柱を結んだ格子戸の仲仕切が設けられて、裏には勝手の方が見えないうようにしてある。農家の「には」は作業場である為に広く、表の方と裏の方との区切りもなく、衝突が置かれる程度であった。表では、あらゆる作業（土臼引き・唐箕あぶち・麦たたき等）をやったが、特に縄ない・俵編み・蓆織り・草履作り等の藁作りをすることが多く、藁をやわらかく丈夫にする為に「藁打ち石」が置かれていた。にはの一隅に普通「もみぐら」が設けられていた。「とうす引き」が一度に出来ないでこれを貯蔵しておく所が必要であったによる。このもみぐらは米俵をつんだり、糠殻を入れたりした。勝手にはくどや風呂場が設けられていた。風呂場は半坪ぐらいが普通で五右衛門風呂であった。一番最初に主人が入り、女はあとの方に入った。たきものの不足かららしい風呂も行われた。風呂やぐらの近くに燃料が散らばらないように、「たきもの置場」が設けられていた。

座敷 台所の奥の南側の部屋を、「さしき」という。特に大切なお客様を接待する場所である。必ず床の間が設けられて、家の人は日常使わないことにしていた。一般では、「床の間」だけというのは少なく、大抵「床の間」は南半分で北半分は仏壇がおかれている仏間であった。仏間が別に座敷の北の部屋に独立している家もあるが、こうした家では、書院や違い棚が設けられた。

奥 座敷の北の部屋を「おく」という。全国的には、納戸又は寢部屋という。家の裏側で、日当りが悪く、通風も不

充分であるが、一家の主人夫婦の寝室であり、戸主権も主婦権とも関連して考えられる部屋である。

台所 表の土間に近い部屋を「だいどこ」という。普通他地方で「出居」「常居」とよんでいる所である。来客と話をする所である。現在は畳敷であるが、元来は板張りの部屋であった。養蚕農家は、この部屋の畳をあげて「おかいこ」を飼った。こうした台所部屋は、蚕の暖房用に主に炭火を使用する「いろり」が切つてあった。土間と台所の仕切りの戸・障子がはめられるようになると、一段高い所に上る不便をなくするため、「上り端^{はな}」「こえん」が設けられた。これが出ると、台所や座敷にまで上る必要のない簡単な用事の客は、ここで用事をすませることが多くなった。

勝手 台所の北の部屋は「かつて」「だいどころ」「きたのま」といわれる。他の部屋が呼び方が一定しているのに、ここだけはいろいろな呼び方がされている。全国的に台所といっているが、ここでも南の部屋と特に区別せずに台所とよんでいる。食事をする所であり、勝手の名が示すように、料理場である。同時に居間であり、家の人が針仕事をしたり、気やすい隣人などと茶のみ話をする場所でもある。

柱 にわとそれに接する二間の部屋との境、つまり三合せにある柱を大黒柱という。最も太く、約一尺角で一番念入りにみがき上げた家の中心にある最も重要な柱である。土間にある柱を「小黒」という。座敷部分の中央、四間通り間仕切の真中に立つ柱を「亭主柱」、または単に「四つがらみ」とよんでいる。座敷とおくの間の柱を、仏壇わきの為か（すず掛け柱[＝]数珠掛け）とよぶ。この四本柱を一般に役柱とよんだ。

天井 瓦葺の家は、板張りになっている。草屋根の家は、座敷の上だけに天井板が張つてあつて、その他の所は、木をわたし、竹の簀をかけ、室の上には蓆をしいて、ごみが落ちないようにしていた。藁二階・たきもの二階と称する様に、藁やたきもの・農具その他の物置になっていた。土間の上が、中二階になっている家もある。

いろり・かまど 台所に蚕の暖房用に、炭火を使用した「いろり」を設けていた。特に養蚕のさかんになった明治後半から、養蚕農家にかぎって造られていた。三尺角の大きさであった。かまどは一般に「くど」といった。又「かまど」ともいう。くどは、上くどと下くどに区別された。下くどは、土間に直接築かれていた。下くどは一般に大きく、屋根裏から自在鍵がさげられているのもあった。大きいのは、「はそり」がかかることも出来、はそりくどとも称した。上くどは「ろく台」がついていた。「ろく台」とは、土公台の訛りで、土公神をまつる祭壇という意味なのであろう。三つくどが多く、大・中・小に分れていて、飯・汁・茶をそれぞれ焚いた。方角が悪いとして、くどの口を北にしたり、東にしたりすることをきらった。

現在、こうしたくどはほとんど見かけなくなった。

燃料 一般に、稲藁・麦稈を使用した。しかし、これも肥料や屋根材料としての兼ね合いから充分とはいえなかった。これは、火力が弱く、餅や強飯などをつくるときの燃料としては役立たない。屋敷林などは限度があるので、薪や柴などは買入れるか労力奉仕の代として入手した。

・附属施設

井・戸

母屋の東北、又は北東に母屋に附いて、「井戸やかた」があった。裏出口に当る所である。簡単な掘り抜き井戸の清水はおいしかった。

便・所

「ちようず場」「せっちん」「かわや」等々の呼び方があり、「二本橋」という人もあった。

農家では、糞尿は大切な肥料であり、これの貯蔵に心懸けた。大きい「土がめ」を地中にうめて、その上に、二枚のふみ板をのせたのが、代表的便所であった。拭くには藁の「すぐた」を適当に切って使用した。これは肥料としてもよく、又こえ桶を荷なう時に、振動によってびたびたとこぼれるのが防げた。

便所は一般に東南が多い。小便所も別に設けられている所が多い。多数の人が入って、人間の汗や油のしみこんだ風呂水をかめに入れて置いて肥料水に使用した。

小・屋・

母屋以外の小さい建物を総称して「こや」という。

納屋^{なや}はいうまでもなく、農作業のための小屋である。しかし、ここに一部屋か二部屋を作り離れ座敷の様にして、老人とか若夫婦の寝起きする所となっているのが多い。こうした一区画を除いて、土間であり、穀物・農作物・農機具・藁や燃料など種々の物置であり、作業場である。厩舎は馬小屋であるが、牛も飼った。牛馬は農耕に欠くことが出来なかった。多くの農家が飼育したが、耕耘機が一般的になり、ほとんど牛馬を見かけなくなった。

倉・

主要な財産である食料や衣類など重要なものを収納しておく所である。その家の状態により大きなちがいがあるが、大体六坪〜八坪ぐらいの人が多い。大家では幾棟もの蔵を有する家もある。蔵は土壁を塗ごめにし、特に火災に備えられた。その為に庇の出は極めて少ない。しっくい^{しっくい}の白壁にしてあるが、雨水に耐える為に側がこいとなっている。この板がこいの黒さが白壁の対比で美しい。この板がこいは火災に際しては不利になるため、非常の際には、一度にとりはずせるようになっていた。

神・仏

神棚をまつる農家が多い。鴨居の上に板棚をつり、白木の祠殿を奉安してある。部屋は台所が一番多いが、いずれも南を向いて奉安している。祠殿には伊勢の大麻が本体であるが、御守、産土のお札などをまつり、松・榊をかざり、燈明を点じ、神酒・神饌を献ずる。

仏・壇

仏壇は大抵の家が座敷の床脇に祀っている。大家になれば、座敷の北の部屋が専門の仏間となる。一般に厨子型で、内部は壇を設け、本尊持仏あるいは祖師の彫像を安置したりした。一般に本尊の画像や名号をかかげている。又祖先の位牌を並べて、その冥福を祈っている。

・建築習俗

新築に至るまで

現在、家の新築をする場合、附属工事一切を請負う建築請負師とよばれる人に、総工事いくらと値段をきめて建ててもらうのが普通である。しかしかつては家を建てるには村人達から承認を得ることが必要であった。新築には、大勢の人の力が必要であり、村人の協力がなければできなかったからである。

地祭り

新築する地所の四隅に青竹をたてて、注連^{しめ}をはり、海・山・里の幸等を供えて神主をよぶ。この土地を卜して家を建てることを神に奏し、居住の安全と繁栄を祈る地鎮祭を行なう。

地づき

地盤の充分でない所は、地づきは非常に大切な仕事である。土台全般にわたって、ていねいについた。特に役柱の場合、一坪ぐらいを掘って、石や砂を入れ、時には更にその下に松の杭を打って念入りに地場固めをおこなった。その際に、櫓を組んで数人が櫓に乗り、丸太の大きいのを中央に建て、それに綱をつけて引上げ、放しては固めた。掲ぐ順序は、乾の角柱すみから順に東の方に掲いで行って、最後の大黒柱を掲いで終る。又この時に水盛りをして、天場石二土台石を配置した。現在のようにコンクリート基礎の場合は必要がない。

この地掲は大変えらいもので、調子をそろえる為に、かけ声と共に歌を唄う。「ここは大事の大黒柱、お手をそろえて掲あげておくれ」などと掲あぐ場所に合った文句で唄う。地づき歌である。

ち・よ・ん・な・は・じ・め・

大工が仕事初めをするのを手斧はじめという。大工は、この日に「間ざお」や「絵図板を作ったり、書いたり、大黒柱などの通り柱を簡単にけずったり、墨を打つ程度の仕事をして終る。建てる者は大工にふるまいをする。

建・前・

柱が立つと棟上げがおこなわれる。この際に行なわれる儀式が上棟式であるが、「棟上げ」「たてまえ」とよんでいる。柱を建て、棟木を上げることである。しかし、くず屋の場合は屋根ふきを終った時であり、瓦葺の家では瓦の仮ふせが終った時である。一般に新築完成の祝いを兼ねたものといってよい。即ち、この日に必ず火をたき、その夜は家族の誰かが現場に寝ることになっている。

建築儀礼の時は、特に日をえらぶ。「三りんぼう」の日や、亥・寅・牛の日には決して建てない。どうしてもこの日にしなければならぬ時には、先づ柱を一本たて、この柱をまた倒して後に、初めから建て直すこともあるが、無理はし

ないようにした。御幣をくず屋は屋根棟に立て、瓦葺は棟木に結びつけた。時には、御幣・さお・扇子等を麻緒で「づかけ柱」にしばって祭ることもした。魔除けとして「目かご」を中央付近の棟木に逆にしてぶら下げた。

建前の祝宴は、本来大工ふるまいなのであろう。別の場所で行れる場合もあるが、現場で行われるのが普通である。大工の棟梁を上座にし、工事関係者がこれにつづき、近所の手伝い人などに酒やご馳走をした。親類の者は、この時に新築の祝いの品々を建築主に贈った。建築主は、これを含めて、関係者に感謝の記念の品々を贈った。

家・移・り

特に決まったことはない。新築した家に仏壇を入れた時に、先祖に感謝して供養をする場合もある。

屋・根・替・え

瓦葺の場合は半永久的であるが、くず屋は早くいたむので、「やねがえ」をする必要がある。この仕事も多数の人手が必要であり、親類・近所の手伝いなしに出来ない。萱は丈夫で、一度葺けば四〇年以上もつために、六〇戸ぐらいの集落では、一年に二軒ぐらいの葺替えですんだ。しかし、萱場の減少と共に小麦からや稲藁になると、四年ぐらいしか持たなくなった。その為に、共同作業ですんでいたのが、専門の屋根職にたよらざるをえなくなった。大体前屋根・後屋根・両づま・むねの順で、四年か五年目ごとに全体が葺替えられるようになった。

第五節 年中行事の二・三について

お正月 お正月の準備は以前は先ず門松から始まった。各個人の家は大晦日の大掃除のあと、戸口には松竹梅を飾り、

また学校・銀行・役所等では松の香のする大きな門松が建てられた。戦後はみどりの愛護からお祝いのしるしに、松竹梅を印刷したカードを市から配布され、戸口に貼って門松の代用としたが、また最近商店街では町を活気づけるためにか、一二月一五日頃になると、杉の木で四角形の木箱を作り、枝松をしんにして斜めに切った竹を三本組み、梅の古木を添え、根元を南天・葉ボタンで色どり、玄関先に左右一対を立てるのも見かけるようになってきた。

注連縄も門松と同じ正月飾りの一種である。これも小さまざまある。木錦紙を垂げた注連縄飾りを門又は戸口の上に飾る。青藁を左じめにして、宝の玉形に藁が結んであるが、えび・橙^{だいだい}・黒炭がつけられ、うらじろをさしてある。「代々住みなれた家で、えびのように腰が曲るまで黒々と（木炭）元気に働きつづけるように」という願いをこめて飾るのである。門梅は廃止になったが、注連縄は市販で求め、いまでも飾られ、どの家でも正月にはなくてはならないもので、近頃では自動車・自転車まで飾られるようになった。



正月の松竹梅（昭和62年・美の和壽司提供）

古老の話によると、大正末期頃まで青壮年の人達は、元旦の朝早く、自分の近親・友人・恩師達の家を訪問し、玄関先にある名刺受けにおいて挨拶に廻った習慣があった。戦時下に入り廃止になったが、この名刺廻りが今の年賀状にも変わったようでもある。

各家での正月の行事は、家のしきたりにより多少のちがいがあがあるが、洗顔やお茶を沸かすに用いる水も「若水」といって、男が汲むという慣例があった。現在でも当地域付近ではその習^{なわ}がいにまだに残っていて、主人が先に起きて水を汲んでおる。

自分の家の仏壇や神棚へお詣りする前に、先ず氏神様に参拝に出かける家もあって、神社では、大晦日の午後十一時頃から元旦の朝にかけ、農家から持ちよった豆がらはじめ枯木で、火が焚かれ、除夜の鐘の鳴る前後から氏神様に列をなして参拝者が増え、豆がらのもえる火に身をあたためると、一年中マメで夏病みしないよう一年間の健康を祈る。それから誰となしに年賀の挨拶をかわして吾が家へと帰る。

白山神社は午前一時、北野神社は午前六時、若宮八幡神社は午前五時から氏子総代・自治会長が代表で神事のお祭りに参拝する。

氏神様の参拝を終り、吾が家の神棚や仏壇にお餅・神酒・お塩等を供え、また床の間、勉強机、井戸、炊事場等にもお餅を供え一年間の無事を祈願する。

神仏の参拝が終ると朝のお雑煮をお祝いすることになる。その席につき、「お目出度う」と挨拶をかわし、食卓でオトソをいただく。トソは酒の中へトソという香料を入れていたが、今は普通の清酒にかわりつつある。とりわけ正月の元旦は笑い顔でお雑煮をいただくのがしきたりであった。

雑煮は、地方によって違うが、当地では普通の汁に二寸角位に切った餅を入れ正月菜（小松菜）を入れて、カツオを削ってかけ食べた。ところによっては里芋を雑煮に入れ、砂糖をかけて食べた。

元旦は、神社参り以外は先ず他人の家は訪問しないのが昔からの習いであり、正月は寝正月という習慣が強い。

「正月の餅はいくつ食べたか？」と若い連中が話の種として語り合うのも正月らしかった。

雑煮の外におセチ料理をどの家庭でも、年の暮にお重（じゅう）に二ハイ・三バイとかさねて準備した。れんこん、栗の煮付け、数の子、黒豆、里芋、田作り等は正月にはかかせない料理であった。その外ニシンの昆布巻、牛蒡（ごぼう）の煮付け。魚類では鮭（さけ）とか鱸（たか）とかを焼いたり、煮たりして沢山の料理を準備した。

以前には小作の人は地主に対して年頭挨拶をし、年頭挨拶廻りは堅い風習であったが、今では豊川稲荷・熱田神宮・多賀神社・伊奈波神社等思い思いのところにしかける。元旦だけは戸を閉めておる店が多いが、町では軽食店がまばらに開店している。

戦前は学校で拝賀式があり「年の始めのためしとて………」と歌った。村長さん・区長さん・寺の住職等の有力者が式に参列され、式が終ると蜜柑を三〜四個もらって帰った。

正月は子供の天国で、男子は新しい洋服、女子は新装の長タモトの着物で、女はマリつき・羽根つき、男は風上げ・コマ廻し等を昔はよくした。忠節橋の川原で風上げ大会もあった。今は子供の遊びも大きく変わって来た。

室内遊戯では、カルタ・双六・トランプが行われた。カルタも子供向きには「いろはカルタ」であったが、大人の間では百人一首が行われた。

正月二日は、農家では仕事始め、以前は朝暗いうちから「打ち初め」といって藁打ちをし縄ないをした。今では藁打

ちのかわりに柿・梨の剪定に半日位働き、働きの意欲を示し仕事始めとする。

婦人の仕事始めは針仕事であった。子供は「書き初め」筆おろしといって、習字を書いた。この書いた用紙を保管し左義長の日に神社で燃やす。用紙が炎にのって高く上ると字が上手になるとかいわれたものであった。

正月二日になるとおセツと称して、嫁入った娘、新婚であれば夫婦を迎え、また孫達をよんで、母親の里へ大勢の人が集まり、お年玉が交換され、会食した。正月料理としては以前は肉のスキ焼をしたりして昼から酒を呑みはすものであったが、最近はこちらがこまごました正月料理の手こしらえであったが現在は料理店より取りよせ、雑煮で昼食を済ませ、飲酒運転の関係等もあって昔ほど酒を呑まないように、どちらかといえば里へ帰って兄弟親と顔を合わせ話に花を咲かせるのが楽しみになってきた。

正月行事は正月三ヶ日で終るが、あとは一月七日の七日正月といって「七草粥」の行事がある。役所では鏡餅で、「ぜんざい」をするところもある。

一月一日には一五日正月、さらに二月一日には二月正月、また旧正月と、いずれも正月気分が雑煮はつきものである。

左義長 新しい年を迎える為にあわただしい年の瀬も迫る頃、松竹梅の門松を氏神・秋葉神社・馬頭観音・消防車庫等に立て、注連飾りをかけ清掃をした。又各家庭でも門松として松の苗木を玄関に立てる風習があった。現在では樹木愛護のため代用に色刷の門松の紙片を玄関に貼るようになった。注連飾りを飾り付け、すすはらいを済ませ、新しい大神宮の護符を棚に納め、すがすがしい元朝を迎える。年頭の挨拶をかわす正月松の内も足早に過ぎ、一四日松の内が終る日、各地で左義長が行われた。正月の飾り物、門松、古い護符、神等を一ヶ所に集めて、燃焼する儀式である。こ

れは神聖な年中行事の一つであった。私達が子供の頃、門松も七日過ぎると取り合ひして大勢で竹藪や家の陰に隠したり、取ったり取られたりした。左義長の日は小学校で書初めを先生に渡してもらい、帰って左義長に上げる。当日は午後より各家々から笹付きの生竹を切り出し、子供等が一本づゝ引きずって川原へ運んだ。又藁を出す家もあった。大勢の大人が持ち寄った沢山の竹・藁・門松・飾り物等をきざみ、割竹で大きな束を作り、それを立てて、四方から支柱竹をして、下から火を付けた。充分火が廻り煙が高く上る時、小学生の私達は書初めを燃える最中の煙りに上げようと懸命になった。高く上ると字が上手になると云われた。火の手が上る頃、その年の暦の開きの方向に大きな束を倒した。この左義長の火に当たると夏病をしない、又左義長の火で焼いた餅を食べると一年中病気をしないと云うので、皆押し合せて煙に目をうるませ、顔を真赤に染めて火に当った。また火をかき出し、餅を家族の数だけ焼いた。黒く炭のついた焼餅を赤い顔してうまいまいと頬張ったものである。

当時の養蚕農家は、左義長で燃えてこげた門松の松の木枝と竹の小切れを大事に貰って帰った。そしてその年の初午の日に、米の粉をね



左 義 長（平野豊氏提供）

り繭や鈴・小判・玉の形の団子を作り、セイロで蒸した。燃料に左義長で貰った松竹を使った。出来上った団子を神佛に供え今年の蚕の飼育、繭の出荷が豊年であるよう祈って、家族で戴いた。

戦前は鷺山・正木・南正木地区は川原で行なっていた。下土居は戸羽川堤で行われていた。戦後住宅が出来て鷺山地区は町内ごとに広場を求めて左義長が行なったが、昭和四四年頃より北野神社境内に一月一五日後より奉賛会を中心に一括して行う様になった。正木地区も現在白山神社境内で行われ、下土居地区も若宮八幡神社境内で行っている。南正木地区は今でも元川原で行っている。

津島神社の祭礼 鷺山お天王さま津島神社の祭礼ともいう。鷺山草平町馬頭観音は三角公園ともいうが、この地が津島神社の跡地である。津島神社は明治四〇年の神社合祀令に依り、明治四三年北野神社に合祀された。

現在地は旧堤防地で昭和二三年頃まで輪中堤の一角で、真昼でも薄暗いところで南北竹藪であった。

七月一五日を祭礼として南北竹藪に藁紐スベナワを張り、紅白提燈を下げた。それを見に祭礼したという。

昔、百姓・町人は上を向いて歩くことが出来ず、年に一度だけ上を向くのがこの祭礼であったと云う。この取り持ちは当時若衆連中、即ち青年会で、大正七年まで続いたという。祭礼の後、紅白の提燈を各家に持ち帰り、四丁目浅衛門地蔵の七月二三日の祭礼に供えたといひ伝える。

北野神社の提燈祭りと**茅の輪祭り** 北野神社の御造営は昭和四三年である。氏子の奉賛会の中から提燈祭りをの聲が高く、各家庭に提燈を配布し七月最後の土曜日の夕暮に各自が持ち寄ってローソクに火をともし、神社の境内の紐に下げ、提燈祭りを再現した。

昭和四五年厄除神事の聲が高まった。茅は生命力に富み繁殖に富み病虫に割合強く、四季に強い。堪える藁草でマコ

そのことであるが、この茅の輪厄除神事が年中行事として七月最後の土曜日を定めて行われる。

神官神事の後、人形の紙を戴き、右肩・左肩を叩き、人形の紙に息を吹込む厄除けの後、神官を先頭にして

神歌

六月の夏越の祓する人は
みなつきはらい

ちとせ
千歳の命のぶと云ふなり

を参列者が合唱し三回茅の輪をくぐった。厄除けの祭礼である。

年々参列者が増加し二〇〇人を越えるに至り他校下からも参列をみた。

今日では、北野神社の年中行事として提燈祭りと茅の輪祭りは定着した。

お月見（仲秋名月） 当地域では旧暦八月十五日（一五日夜）を芋名月と呼んで、今年収穫の里芋を盆にのせ、丁寧なところでは団子をこしらえて供え、ススキ・ハギを立てて涼み台を表に出し、あるいは縁側にゴザを敷いたりして名月を仰いで秋の稔りの豊かさを喜びあった。子供達は人影を追いまわして良く遊んだ。

第六節 俗

信

吉凶・判断

- ・朝蜘蛛は吉、夜蜘蛛は凶。
- ・新しい下駄の鼻緒が切れると凶事が起こる。

- ・ 烏が鳴くと、その近くに死にかけた人あり。
- ・ 手にうおの目ができると凶。
- ・ 耳がほてる（かゆい）とよいことあり。
- ・ 亀が縁の下にはいると凶。
- ・ 月が赤いと地震が近い。
- ・ 鏡がこわれると凶。
- ・ 星が自分の方向に流れると吉。
- ・ いちじくの木が屋根より高いのは凶。
- ・ 家を出るとき、下駄の鼻緒が切れると凶。
- ・ 家から火の玉が出ると、その家に死者あり。

占　　い

- ・ 朝の夢は正夢。
- ・ ねずみ（家へび）がいなくなると火事になる。
- ・ 目の下にほくろがあるのは泣き性。
- ・ 蛇の夢をみるとよいことがある。
- ・ 左義長の倒れた方向は、その年、悪いことがない。
- ・ 蛇が木に登ると雨が降る。

- ・弟の家を東前に建てると、弟の方が出世をする。
- ・齒の抜ける夢は凶。
- ・朝、来客があると、その日は来客が多い。
- ・朝火事は栄え、夕火事は滅びる。
- ・魚の夢をみると、その日は運よし。
- ・馬の夢をみると、かぜをひく。
- ・柱の西東に釘をうつと病気になる。

禁忌

- ・友引に葬式をしてはいけない。
- ・新築は三隣亡を避けよ。
- ・葬式・出産のあと一ヶ月は宮にはいつてはならない。
- ・産婦のいる家では、かまどを直してはならない。
- ・妊婦は火葬場の火（または火事）を見てはいけない。（子どもにあざができる）
- ・葬式の列をきつてはならない。すぐ葬式が出る。
- ・葬式するとき、妊婦は帯に鏡を入れよ。
- ・夜、爪を切ると親の死にめにあえない。
- ・縄を家で燃やしてはならない。火事が起こる。

- ・蛇を指さすと、その指がくさる。
- ・水の中に湯を入れてはならない。
- ・家を出るとき針を使うな。
- ・井戸をつぶすと凶事が起こる。
- ・新しいはきものは夜おろしてはいけない。
- ・箸から箸へ食べものを移すな。
- ・小便をみみずにかけていけない。
- ・かまどの上に切れものを置いてはいけない。
- ・夜、茶わんをたたくと乞食こじきが来る。
- ・夕方のお花はもらうな。
- ・食膳にたくあんを三切つけるな。

俗 信

- ・ものもらいができたら、ひとにものをもらうとなおる。
- ・いぼができたら、人に見られないようにごまの花の北むきに咲いているものをとって、いぼをこするとなおる。
- ・左義長の焼いた餅を食べると風邪をひかない。
- ・下の歯が抜けたら屋根に、上の歯が抜けたらあまだれ落ちのところに捨てる。
- ・写真のまん中に入ると早く死ぬ。(三人のまん中)

・客を帰らせたいときは簀を立てる。

民間療法

・風邪の時は生卵と酒をまぜて飲むとよい。

・汗ばには桃の葉を煎じてだんじるとよい。

・子どものひきつけにはゆきのしたを塩でもんでその汁を飲ませるとよい。

・いぼを落すには茄子で撫でて、その茄子を土に埋めておくとよい。

・髪の毛をやすと狂人になる。

・子どもが火なぶりをすると寝小便をする。

・食事のあと、すぐ横になると牛になる。

(各務義章氏)

第七節 郷土の方言

郷土の方言 この方言は必ずしも郷土のみで通用するもののみに限っていない。中には広範囲で用いられているものもあり、全く訛りがなくて標準語の中へ入れてもよいものも混っている。

方言の上から郷土の特色を見るために、同義語のうちで、多用されているもの、郷土以外で既に死語として流用してないもの、又一つの内容を種々の同義語を用いているものも入れたものもある。

大体五〇音順に配列した。又落としているものも多いと思われる。表現出来ぬ発音も非常に多く、ただアクセントだ

けを傍示した。

(一) 内||原語・印||アクセント

(幼)||幼児語。印||接頭・接尾語

(卑)||卑語

(地)||地名

上段……………方言

下段……………共通語

(あ)

方言

あーれや……………共通語

あい……………鮎

あいさ……………間

あいさに……………ときたま

あいだ……………平生

あいだ食い……………間食

あいつ、あそこ……………彼

あいまち……………怪我

あいまに、あいまーと……………たまに

あんよ……………足(幼)

あかいべ……………きれいな着

物

あかん、あかへん……………駄目

あかせん、あかすかい……………

あごたをたたく……………口答えする

あさげ……………朝飯

あすぶ……………遊ぶ

あすぶ日……………休日

あぜ豆……………大豆

あたい、あて……………私

あつちべた……………あちら側

あっぱ……………帽子(幼)

あとから……………次々と

網デッキ……………焼網

あぬく……………あおむく

あぬき……………背中を下に

あのほれ……………あのーね

あばばこく……………水に溺れる

あぶつ……………扇ぐ

あほろく……………馬鹿、でたらめ

あま、あまんちょ……………女兒(阿魔)

甘やらかす……………甘やかす

あやかす……………あやす

あやこやしい……………ややこしい

あらすか、あらすかい……………あるもので

ありあい、ありあいこ……………全部

あんぐりこく……………当てが外れる

あんじよう……………思う通り

あんね、あねさ、あねご……………姉

あんばよう……………上手に

あんばいが悪い……………病気をしている

(い)

いいだくり……………云い草

いがむ……………ゆがむ

いきよる……………行きつつあ

る

いげ……………湯気

いこしょ……………持って来い

いごと……………どうにか

いしがけ……………石垣

いしゃ殿……………お医者さん

いじる……………ねだる、な

ぶる

いする……………揺する

いず……………柚子

いずみ……………薬製の保温

具

いずる……………譲る

いだし、いだつあま

雷

いっぺんぎし……………一度だけ

いび……………指

う

いなみ……………南

いのく、いごく……………動く

いんびつ、いんべつ……………鉛筆

(う)

うしゃがった……………やつてきた

(卑)

うしゃがれ！……………行つてしま

え！

うつつくしょう……………全部(美

しょう)

嘘こく……………嘘を云う

受けやく……………野球の捕手

うでる……………ゆでる

うと……………音

うまい……………おいしい

うまうま……………食べ物(幼)

うむす……………蒸す

うるちね……………うるち(梗)

うんと……………沢山に

同じ

(え)

えーか……………よいですか

えーかげん……………よい加減

えーかげん……………粗雑に

えいか……………よろしいで

すか

えか……………きつとです

よ

えつと……………長い間

えつとかめ……………久し振り

えべつさま……………恵比須様

えらい……………苦しい

えんげ豆……………隠元豆

えんど豆……………豌豆

(お)

おあいそ……………お八つ、駄

質

お出でやす……………いらっしや

いませ

おい……………多い、覆い

おいた……………嫌です、や

めた

おいねる……………背負う

大きに……………有難う
 大騒動……………大変
 お蚕様……………蚕
 おかか……………妻
 おかつつあま……………奥さん
 おきんさい……………やめなさい
 おくれんさいた……………下さった
 おくんさいた……………下さった
 おこんこ……………狐(幼)
 おこんこずし……………稲荷ずし
 おじい……………祖父、お爺さん
 おしやま……………おませ
 おじや……………雑炊
 おすつしょう……………お涼しう
 おぞい……………つまらぬ
 おそがい……………恐ろしい
 お大尽……………金持
 お頼もうします……………お願ひしま
 す
 お宝……………お利口

おたんちん……………馬鹿
 お茶飲む……………朝食をとる
 おちょうず……………大便(お打水)
 おつつい……………おつゆ
 おつさま……………和尚様
 おつさま……………叔父、伯父様
 おつか、おつかはん……………母
 おつかはま、おつかさま……………父
 おとつあま、おやじ……………父
 おてつたい……………お手伝
 おとつい……………一昨日
 おとらかす……………落とす
 おぶ……………背負う
 お仏事……………報恩講
 おまはん、おまさん……………あなた
 おまい、おんし……………お迎え
 おむかい……………おむかい
 おもる……………おごる、供

応ずる
 おやかましい……………お忙しい
 およばれ……………招待されて
 おんさる……………食事をする
 おんつ……………来られる、居られる
 おんばこ……………雄
 おんなし……………おぼこ
 おんじ……………同じ
 (か)
 かい……………粥
 かい……………痒い
 かいど……………街道
 がいろ……………蛙
 かい……………帰る、倒れ
 かえどり……………る
 か……………水をかえ出
 かがはいい……………して川魚を
 まばゆい……………とる

かぐら	獅子舞（神楽）	かんつ	酌婦（卑）	きんの！	昨日
かぜひく	薬の効力がなくなる	がんど	大鋸	きんによろ	
かたちゃんば	嫁にやる	かんねん	勘忍	きんのーのゆうさ	昨夜
かど	ちんば	がんぶり	屋根の峰の伏せ瓦	近所	辺、あたり
かに	蟹	(き)			
かねえか	勘忍してね	きしよろ	煙管	ぐざる	泣言をいう
かぶる	冠むる	貴様	あなた（卑）	くそだわけ	馬鹿野郎
かぶつ	株	雉打ち	山野で大便する	くそたれ	馬鹿（糞垂れ）
かみいさ	髪結いさん	ぎす	きりぎりす	くど	竈（かま）
かみすり	かみそり	きつつくらい	大嫌い	首っ玉	首
かやす	返えす	ぎぼし	擬宝珠	くまぜ	熊手
からかす	枯らす	きめる	素手で魚を捕える	くんさい	下さい
官員様	公務員	きやす	消す	くんさる	貰う
がん桶	棺	ギヤマン	硝子	グンビーバ	ジャンケン
がんがん	罐	仰山こと	沢山に	(け)	
かんこ	下駄（幼）	きんない	黄色い	けつまづく	つまづく
勘考する	工夫する	ぎんな	銀杏	けなうい	羨しい
かんじょより	観世燃り			けぶたい	煙むい

けんげ……………蓮華草
げんの……………金槌(玄能)

(二)

こうえ……………付属建物
こうしゃく……………苦情(講釈)
こうとい……………地味
こうらいきび……………唐黍(高麗黍)

ごえん様……………御院主様
ごが湧く……………腹が立つ

こけ……………きのこ

こけら……………苔

ござった……………来られた

ごじょつさ……………遊芸の盲女

こしょ……………胡椒

ごしんぞ……………奥さん(御新造)

こすい……………悪る賢しこ
い

こそばいい……………くすくすった

こたいられん……………たまらぬ
ごつつい……………下品な
こないだ……………先日(此の間)

小屋……………昼と夜の間

こぼ……………小さい男の子(小坊)

こぼらかす……………こぼす

ごま……………独楽

ごみ取り……………塵取り

ごもく……………かきまぜ飯

御無礼します……………お先に失礼します。さ

ごんぼ……………牛蒡

ごん十……………五十

ごん六……………五六(坪五十六枚ひける平瓦)

こんばえ……………小魚
こんどかいし……………今度目
こんどかえり

(さ)

さいさい……………度々(再々)

ざい払い……………塵払い

さくまう……………ごまかす

ざっと……………あらまし

ざっしもない……………散らかして

ざと……………砂糖

さぶい……………寒い

さみしいまい……………忌中見舞

さより……………さんま

さんきら……………山帰来

猿すべり……………百日紅

さんじつ……………算術

さんしょ……………山椒

(し)

じーじ……………字(幼)
 しかん……………低下駄
 しき……………敷居
 しきび……………櫛
 じぎょう……………授業
 じげ……………自分の村落
 舌びら、舌べら……………舌
 してーもん……………単衣物
 じっさま……………祖父、爺さん
 しとねる……………育てる
 しばみ……………草簀(芝簀)
 じばん……………襦袢
 しぶと……………屍
 しぶち……………霧雨
 始末……………儉約
 しまつちよく……………片付けておく
 しまわした……………終られた、失敗された

しゃがむ……………かがむ
 じゃがたら……………じゃが芋
 しゃかん……………左官
 じゃけら……………冗談
 じゃっこ……………雑魚
 じゃれる……………戯れる
 じょーや……………何度も何度も
 しょーばい……………いつも、常々
 しょうぶわけ……………形見分け
 じょーろり……………義太夫(浄瑠璃)
 じより……………草履
 じょれん……………刃口
 じょーらかす……………あぐらをかく
 しょんべきや……………小便所
 しろ……………棕櫚
 しんぱり……………戸締りの棒
 しんや……………分家

(す)

しんじょか……………どう考えても
 すがる……………しおれる
 ずくし……………熟した果物
 すぐる……………間引する
 すけない……………少ない
 すこた……………頭
 ずず……………珠数
 すずむ……………沈む
 すっぺり……………全部
 ずっない……………苦しい
 すも……………相撲
 すりこ鉢……………搦り鉢
 すごき……………兵子帯
 すんでに……………もう少し
 せーう……………告げる、いう
 う

(せ)

せーな……………しいな(粧)
せったった……………云ってやつ

ぜに、ぜぜ……………た

せる……………お金

せんがない……………侵犯する

せんど……………さみしい

せんちや……………毎々

せんべ……………雪隠

せんべ……………煎餅

(そ)

そうましい……………騒がしい

そくなう……………損なう

そそくい……………小修理

そっくり……………全部

存外……………思ったより

も

(た)

大概……………多分

たいくそもない……………大変ひどい

だいこ……………大根

大事……………大切

だいつう……………上品、粹な

大抵……………多分

たかぶくり……………高下駄

たきもん……………薪

たぐり……………水泳の抜き

ただくさ……………手

だちかけ……………粗雑

だちかん、だちやかん……………万能

たぼこ……………駄目

たばこ……………煙草

だまかす……………だます

だましかる……………黙る

たまや……………はきだめ

場、汚水の溜り場

だるい……………つかれる

たんこぶ……………こぶ

だんだ……………お風呂(幼)

たんと……………沢山

(ち)

ちーも……………里芋(地芋)

ちそう……………紫蘇

ちだ……………地面

ちゃんど……………きっと

ちやまが……………茶釜

ちようけ……………手桶

ちようすく……………威張る、調

ちようらかす……………子づく

あやす、小馬鹿にする

蝶番い……………江州梯子

ちよびつと……………少し

ちゆうき……………中風

ちび……………赤ん坊

ちんころ……………杯

(つ)

ついで……………露

つうろく……………釣り合い

つきあげ……………天婦羅

つくつくし……………土筆
 つくねる……………無造作に積
 づつない……………息苦しい
 つぼ、つぼどん……………たにし
 つべたい……………冷い
 つよ……………杖
 つるくる……………吊す

(て)

てかけ……………めかけ
 てこしばい……………人形芝居
 てし……………小皿
 てつたい……………手伝い
 てのこい……………手拭
 出刃……………出刃包丁
 でほろく……………出鱈目
 でんがらかす……………転倒させる
 電信棒……………電柱
 電気……………電灯
 電気玉……………電球

てんづき……………天
 てんこもり……………山盛り
 てっぺん……………頂上
 てんで……………丸つきり
 てんでに……………各自に

(と)

とーお……………十
 とーまめ……………そら豆
 とーちやく……………横着
 とい……………樋
 どえらい……………大きい
 どえらいめ……………ひどいめ
 とおし……………ふるい
 とかけ……………とかげ
 どぎつつきらい……………大嫌い
 どく……………のく
 どける……………のける
 どこやか……………いろんな所
 どんこんじゃわる……………根性悪い
 どだい……………どうも

どち……………スッポン
 とと……………魚
 とのきび……………高粱
 どべ、どべくそ、とべんこ……………ビリ
 とへつもない……………大変に
 とふ……………豆腐
 とぼす……………燈す
 どもならん……………嫌です
 とよ……………樋
 とろくさい……………愚鈍な
 とらまえる……………捕える
 どろ……………土
 とん辛子……………唐辛子
 とんがる……………尖る
 とんぐわ……………鳶鯉
 とんずり……………つるはし
 とんと……………丸つきり

(な)

菜刀……………包丁
 泣きびそ……………泣き虫

なすび……………茄子

なせる……………撫でる

なぬか日……………七日正月

なり……………かつこう

なもし、なも……………で、ねえ

なんぞかぞ、なんぞかいし……………何か

なんでか……………色々

なんで、なんぜ……………何故

(に)

にーま、にー……………兄

にこ……………藁しへ

にんじつ……………忍術

(ぬ)

ぬあぎ……………縫い上げ

(ね)

ねー、ねーさま……………姉

ねっから……………一向に

ねっこ……………根

ねね……………赤ちゃん

(幼)

ねぶる……………眠る

(の)

のーならかす……………失くする

のぐ……………脱ぐ

のくとい……………温かい

のたる……………手で田の草をとる

の休み……………田植後の農休日

のるい……………ぬるい

のんぼり……………幟

(は)

はい……………蠅

はいとーに……………ずっと前に

はしりごーく……………走り競争

はばい、はばこい……………汚い

はまが……………羽釜

針坊主……………針山

はよ……………早く

はんぞ……………手洗桶

はんど……………水瓶

(ひ)

ひかられる……………叱かられる

ひく……………敷く

びしょ……………実っていない

ひだるい……………お腹が空く

ひず……………元氣

びっくりこく……………びっくりする

びっちゅう……………備中鉢

びんちょう……………女の子(卑)

ひなたご……………ひなたぼっ

ひね……………こ

ひね……………年越しした

ひぼ……………もの

紐……………紐

ひやすみ……………昼の休中の

仮眠

ひより……………低下駄(日

和)

ひよんな……………思いがけぬ

ひらべったい……………平たい

ひろいやく……………野球の野手

(ふ)

ふあ…ふあ……………女の簡単服

ふけらかす……………見せびらか

す

ふしゃく……………柄杓

ふすべ……………黒子

ふたいり……………二人

ふたぐ……………塞ぐ

ぶちようほう……………酒が飲み

ぬ、不出来、

失敗

ぶち。おちる……………落ちる

ぶつ……………打つ

ふやかす……………水につけて

浸す

ぶらくる……………吊す

風呂敷

ふるしき……………鉞力

ぶんたこ……………柏餅の一種

ぶんそうや……………ハイそうで

す

ふんでも……………それでも

ふんと……………本当

ふんなら……………それでは

ぶんぶ、ぶー……………お茶、お水

(幼)

(へ)

へいともない……………お気の毒な

べし折る……………折る

へつつく……………ひつつく

へぼい……………弱い

へらかす……………減らす

べろ……………舌

べんと……………弁当

へんねしい……………嫉ましい

へんび、へんべ……………蛇

(ほ)

ほうたがい……………困惑する

ほうたぼ……………頼たぶ

ほうやい……………鬼ごっこ

ほかる……………捨てる

ほぜくる……………ほじくる

ぼた餅……………おはぎ

ぼた……………土手、堤防

ボチ……………米の粉製の

餅

ほったろ……………蟹

ほつく……………俳句(発句)

ボテ振り……………屑買い屋

ほぼ……………木の实

ほれ……………それっ

ほれから……………それから

ほん……………ハイ、ふん

ほんや……………(返事) 本家

(ま)

まあじつき……………もうすぐ
まいかき……………エプロン
まいげ……………眉毛
まいく……………狂俳(前句)
まぐたねる……………折り曲げる
まちーく……………町へ行く
まつご……………松の枯落葉
まつたら……………新品
まめ……………達者
丸こい……………丸い
まわし……………用意
まんごく……………糲摺機
まんじ……………饅頭
まんだ……………未だ
まんりき……………稲こぎ
まんるくたい……………まん丸い
まんろくたい……………

(み)

見せびらかす……………見せて羨しがらす
みね……………棟

(む)

むかぜ……………百足虫
むくげ……………槿
むつご……………蛹、蚕の蛹
むりあいこ……………無理に
無理と……………わざと

(め)

めちゃんばんぼ……………滅茶苦茶
めめぞ……………みみず
めれたい……………目出度い
めんつ……………雌
めんどみ……………看病人
めんどくさい……………面倒な

(も)

もうやい……………共同(最合
い)
もせる……………古くなって
変質するこ
と

もみじ……………楓(紅葉)

(や)

やぐい……………もろくて丈
夫でない
やくとに……………わざと
やけずり……………火傷
屋敷廻り……………青大将
やぜん……………昨夜(夜前)
やたくた……………矢鱈に
やっとか……………長い間
やっとか目……………久し振り
やっぱし……………やっぱり
やにこい……………しつこい
山のこ……………山神の祭り

やらしい……………嫌らしい
 やる……………与える
 やんばよう……………上手に
 やんちゃふむ……………だだをこね
 る

(ゆ)

有志する……………寄付する
 夕立ち……………雷
 ゆうなび……………夜業
 ゆんべ……………昨夜

(よ)

よーさ……………夜
 よーけ……………沢山(余計)
 よーはん……………夕食
 よーなび……………夜業
 ようなかつた……………亡くなられ
 た
 ようやる……………よく出来る
 よがある……………用がある

よき……………斧
 よつころ……………余程
 よど……………よだれ
 よむぎ……………蓬
 嫁さん……………奥さん
 よりやい……………合同会議
 よろこびする……………出産する

(ら)

らっか豆……………落花生
 らっしもない……………乱雑な
 られる……………あわてもが
 く

(り)

りきむ……………怒る
 りよる……………調理する

(る)

るいでき……………るいれき

(わ)

わっち……………私
 わっちんた……………私達
 わっちんところ……………私の所
 わりあい……………比較的
 わるき……………割り木
 (各務義章氏)